

例年のごとく、黄葉のもつとも美しい一月下旬のやきもきする季節がめぐってきた。この時期には、大会に本誌が間に合うかどうかという心配が毎年くりかえされるが、いまやこの心配は、われわれ編集者の晚秋の季節感と、切り離しがたく結びついてしまった。しかし、実のところ今年は、本当に危ない状況になっている。魔の一三号にならないよう、残された時間努力するしかない。

本号には、全国からの出土報告五一件を掲載できた。七号の六四件、八号の五六件につぐ多さである。ご多忙の中、ご執筆いただいた各位に御礼申し上げる。このご協力こそ、本誌の顔とも言うべきこの欄をつくりあげる最大の要素であって、感謝にたえない。本欄は、すでに一定のパターンが定着している。そのため、心なラズも原稿に手を入れさせていただく場合がどうしても出てしまう。これは、やや大きさにいえ、情報の均質性を保つ意図からであって、なんの他意もない。どうぞお許しいただきたい。

また、論文は樋口知志氏・鈴木靖民氏・館野和己氏の三編を掲載できた。三氏に感謝する。樋口氏の論文は、昨年の大会報告をもとにあらたにご執筆いただいた雄編である。二条大路木簡という血のしたたる新出史料を用いて、贅制度に正面から切り込んだはつらつとしたもので、今後議論を呼ぶと思われる。また、鈴木・館野氏の

二編は、いずれも永年の宿題であったものである。かつて過去の出土木簡の再追跡を委員会・幹事会でおこなって以来、掲載を試みてきたが、いずれもうまくいかなかつた。両氏のご努力で、今やっと実現することができ、私としてはようやく胸のつかえがおりた。

さて、この文章を書くために、創刊号から編集後記を読み返してみた。はじめは本誌のスタイルづくりについて述べられ、三、四号からそれが定着したという言及がある。ついで六、七号あたりから、「どうにか間に合いそう」の文字が毎号見られるようになり、一〇号を越すと「いつかは間に合わなくなるのでは」と、そのトーンが強まってくる。このような編集後記の推移は、私の実感ともよく合致しており、編集の実情が反映されているといえる。

そこで前号から、編集担当の交替制を試みている。ところが早くも本号で、編集のほとんどすべてを、渡辺晃宏氏をはじめ奈文研その他の幹事諸氏にやっていた事態となってしまった。担当の私は周辺において、ただ足手まといになつただけであった。次号以下の担当予定者の忙しさからみて、いよいよ問題が深まってきた。

会員の増加傾向がつづくなか、前号の田中琢氏の問題提起以来、委員会・幹事会では、会のあり方をめぐって検討が重ねられている。会を心から思う気持ちは同じでありながら、議論が時に高ぶつてしまふのは悲しいが、議論を尽くす必要がある。それと同時に、編集体制も検討をつづければならないと思われる。

(柴原永遠男)